

氏 名 川崎 ます美  
ヨ ミ ガ ナ カワサキ マスミ  
学位の種類 博士(学術)  
学位記番号 博音第314号  
学位授与年月日 平成31年3月25日  
学位論文等題目 〈論文〉  
カンタータ《人間の顔》にみるプーランクの独自性  
—詩の選択と付曲の手法からの考察—

論文等審査委員

主査	東京藝術大学	准教授(音楽学部)	大森 晋輔
副査	東京藝術大学	教授(音楽学部)	檜山 哲彦
副査	東京藝術大学	教授(音楽学部)	畑 瞬一郎
副査	東京藝術大学	教授(音楽学部)	杉本 和寛
副査	東京藝術大学	准教授(音楽学部)	侘美 真理
副査	東京藝術大学	教授(音楽学部)	野々下 由香里

(論文内容の要旨)

本論文は、フランシス・プーランクの世俗カンタータ《人間の声》FP120を考察の対象とし、主にテキスト選択と付曲におけるテキスト操作など、作曲家が詩とどのように対峙したかを具体的に検証することにより、その独自性を明らかにすることを目的とするものである。プーランクの中期の代表作の一つである《人間の顔》は、プーランクの作品で唯一の、また当時の合唱曲としても珍しい無伴奏二重合唱曲という形態をとり、また使用テキストが地下出版のレジスタンス詩集であったこと、初演が英語訳詞によりイギリスで行われたことなど、異色の背景を持つ作品でもある。この作品の成立には、占領下フランスの社会情勢や、詩人ポール・エリュアールとの関係など、多くの注目すべき点が含まれている。本論文では次の3つの章によって考察を進め、それらを分析、総合することにより、《人間の顔》によってプーランクが実現した独自の境地とは何であったかを述べる。

まず、第1章「プーランクと合唱曲」で全般の特徴や成立事情を概観し、それらを参照しながら、《人間の顔》の概要と演奏形態の特徴であることを明らかにする。プーランクの作品で唯一の「二重合唱」を用いた意義、「カンタータ」と銘打った意図は何であったのか。

第2章「プーランクとエリュアール」では、このカンタータのテキストの原作者である、詩人ポール・エリュアールについて、その略歴およびプーランクとの関わり方を述べる。とくに、エリュアールの詩によって作られた声楽作品が、どのようなものであり、それらを介して二人がどのように影響し合ったかを書簡等を通じて明らかにする。その上で、《人間の顔》の成立過程を、社会背景とともに解き明かす。これらの背景を踏まえて、第3章「《人間の顔》全8曲の詩と付曲」では、全体の構成を把握したのち、8曲それぞれについて、詩と音楽とを詳細に考察し、プーランクが1冊の「詩集」から、いかに「カンタータ」を作り上げたか、合唱曲ならではの彼の歌詞の配置法等を明らかにする。この点は特に重要と考え、歌詞配置の実際が、詩句の大意と同時に視覚的に容易に把握できるよう、独自の各曲歌詞配置図を作成し、資料として添付した。

終章では、上記の考察を総合し、プーランクの「演出家」としての綿密な計算、エリュアールの詩への理解と敬意、そして作曲家として、人間としての成熟など、いくつもの要素が重なり合うことで、到達できた《人間の顔》とプーランクの独自性について述べる。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、フランシス・プーランクの世俗カンタータ《人間の顔》において、作曲家が詩とどのように向き合って合唱作品を作り上げているのかを具体的に検証したものである。1943年夏、ドイツ軍による占領下で作られたこの作品は、エリュアールのレジスタンス詩集『詩と真実 1942』をもとにしたその内容もさることながら、演奏効果の高い合唱作品(なかでもレジスタンス賛歌として親しまれている抵抗詩をもとにした終曲の「自由」は全曲中の白眉である)として評価を得ていながらも、作品そのものを対象とした先行研究はほぼない。エリュアールの詩に付曲したプーランクの多くの歌曲が研究対象になっている状況とは対照的であり、本論文はこの空隙を埋めるべく着手されている。

第1章「プーランクと合唱」においては、プーランクの合唱作品全般を概観した上で、「無伴奏混声6部二重合唱」という珍しい形式をもつ本作品の実験的意図とともに、「カンタータ」という名称が含意するものについて探る。第2章「プーランクとエリュアール」では、詩人と作曲家の関係の概要をおさえながら、当時どのような経緯で《人間の顔》の作曲がなされ初演に至ったか、またそこでどのような評価を得たのかが詩人との書簡などを交えながら綴られる。本論文はいわばここまでが前段で、主要部分となる第3章「《人間の顔》全8曲の考察」では、1曲ごとにエリュアールの詩の形式や解釈、およびプーランクの付曲の特徴について仔細に論じられる。手法としては、作曲にあたってのプーランクの詩の選択や曲順の配置方法、また特に詩の言葉のパートごとの配置のありように着目し、それによって彼が得ようとした効果の検証に焦点が当たっており、最後に以上のような詳述を経て辿り着いたプーランクの「独自性」についての一定の結論が述べられる。

本論文は、すでに筆者が久野麗名義で上梓した評伝『プーランクを探して——音楽と人生と』(春秋社、2013年)の成果を引き継ぎながら、プーランク研究において光の当たりにくい世俗合唱作品における詩と音楽の関係という困難な課題に挑

んだもので、特に詩の解釈、およびそれをもとにした歌詞配置の根拠や演奏効果の考察など、実際に作品を演奏する上でもきわめて豊かなヒントに溢れている。特に、全曲の歌詞配置の実態が視覚的に把握できる独自の添付資料は貴重である。20世紀以降の合唱作品を詩との関係で分析・考察する上でも、本論文は一つのモデルとなりうることは強調しておきたい。また、エリュアール研究の文脈では等閑視されがちな「詩への付曲」に関する考察も、この分野での研究の不足を埋めるものであろう。

以上のような美点が評価される一方、本論文には次のような問題もある。まず、推敲の不十分さである。文章自体は筆者自身の持ち味である読みやすさを備えているだけに、全体として形式的な乱れによる読者への配慮不足が目立つ。また、第3章の記述は、ある程度の根拠が挙げられている箇所さえ推量表現が多用され、筆者の主張が明確に伝わらないこともしばしばである。さらに欲を言えば、詩の解釈についてもエリュアールの他の詩の傾向を踏まえた上で今一步の踏み込みがほしい。しかし、何より一番惜しまれるのは、詳細な分析の総括として導き出された結論部分である。作品を成功に導いた背景として「作曲家の詩人への共感」があるものの、詩それだけでは「娯楽」とは成りえないがために、一種の「パフォーマンス」としての音楽が生み出されたという結びは少々首を傾げざるを得ず、第3章全体の綿密な考察や熱量にそぐわない、凡庸かつ雑駁なものとなっている。

しかし、そうした欠点は、内外でも類を見ないほど詳細にプーランクの代表的な世俗合唱作品の実態に迫っている本論文の価値を損なうものではない。今後のプーランク研究において本論文が示しえた新たな可能性に鑑みて学位授与にふさわしいものと判断し、合格とした。